日本国民文学全集 12

西鶴名作集

井原西鶴

河出書房版

日本国民文学全集　第一二巻　西鶴名作集　第四回配本

昭和三十　劇　昭和三十年十二月二十日初版発行

訳者代表　丹羽文雄

発行者　東京都千代田区神田小川町三ノ八　河出孝雄

印刷者　東京都港区芝三田豊岡町八　川口芳太郎

定価三四〇円

発行所　株式会社　河出書房　東京都千代田区神田小川町三ノ八　電話(二九)三七二一番　振替東京一〇八〇二番

図書印刷株式会社印刷・小高製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

西鶴名作集

好色一代男　里見　弴訳　一
好色五人女　武田麟太郎訳　八一
好色一代女　丹羽文雄訳　一三
本朝二十不孝　吉井　勇訳　一六七
武道伝来記　菊池　寛訳　二〇七
世間胸算用　尾崎一雄訳　二九一
西鶴置土産　武田麟太郎訳　三三

訳者の言葉　三六七
年譜　三六九
解説　暉峻康隆　三七一

装幀　原弘

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

好色一代男

里見　弴
訳

目次

巻の一

消した所が恋のはじまり（七歳）　三
はずかしながら文言葉（八歳）　四
人には見せぬ所（九歳）　五
袖の時雨は懸るがさいわい（十歳）　六
尋ねて聞く程ちぎり（十一歳）　八
煩悩の垢掻（十二歳）　九
別れは当座払（十三歳）　一一

巻の二

はにうの寝道具（十四歳）　一三
髪きりても捨てられぬ世（十五歳）　一四
女は思わくの外（十六歳）　一五
誓紙のうるし判（十七歳）　一七
旅の出来心（十八歳）　一八
出家にならねばならず（十九歳）　二〇
うら屋も住所（二十歳）　二一

巻の三

恋の捨銀（二十一歳）　二三
袖の海の看売（二十二歳）　二四
是非もらい着物（二十三歳）　二五
一夜の枕物ぐるい（二十四歳）　二七
集札は五匁の外（二十五歳）　二八
木綿布子もかりの世（二十六歳）　三〇
口舌の事ふれ（二十七歳）　三一

巻の四

因果の関守（二十八歳）　三三
かたみの水櫛（二十九歳）　三五
夢の太刀風（三十歳）　三六
変ったものは男傾城（三十一歳）　三八
昼のつり狐（三十二歳）　三九
目に三月（三十三歳）　四〇
火神鳴の雲隠（三十四歳）　四一

巻の五

後には様附けて呼ぶ（三十五歳）　四三
ねがいの掻餅（三十六歳）　四四
恋の世中に是は又（三十七歳）　四六
命捨てての光物（三十八歳）　四七
一日貸して何程が物ぞ（三十九歳）　四九
当流の男を見知らぬ（四十歳）　五〇
今爰へ尻が出物（四十一歳）　五一

巻の六

喰さして袖の橘（四十二歳）　五三
身は火にくばるとも（四十三歳）　五四
心中箱（四十四歳）　五六
寝覚の菜好み（四十五歳）　五七
ながめは初姿（四十六歳）　五九
匂いはかずけ物（四十七歳）　六〇
全盛歌書羽織（四十八歳）　六一

巻の七

その面影は雪むかし（四十九歳）　六三
末社楽あそび（五十歳）　六四
人の知らぬわたくし銀（五十一歳）　六六
差す　盃は百二十里（五十二歳）　六七
諸分の日帳（五十三歳）　六九
口添えて酒軽籠（五十四歳）　七〇
新町の夕暮島原の曙（五十五歳）　七二

巻の八

らく寝の車（五十六歳）　七四
情の賭陸（五十七歳）　七五
一盃足らいで恋里（五十八歳）　七七
都の姿人形（五十九歳）　七八
床の責道具（六十歳）　七九

巻の一

消した所が恋のはじまり

桜花の盛りはせいぜい一日、いかな明月もみるみる西山に傾いてしまう。かく無常迅速の世を観ずれば、なんでもしたい三昧し尽すが勝と、但馬の国、生野銀山の近村から京都に出て来て、世事一切そっちのけの、寝ても覚めても女色男色に身をもち頽し、渾名を「夢介」と呼ばれている男があった。名古屋三左だの、加賀の八だのという、お揃いに菱の七所紋をつけたりして、当時隠れもない遊蕩児がいたが、その仲間に加わって、片時も酒っ気を絶したことがない。毎晩のように、一条通りを戻橋にかけて、ある時は若衆扮装で練り歩くかと思えば、墨染の長袖で僧形、または鬘鬘を被って男達、といったふうな変装ぶりだから、場所がら、「化物が通る」と評判を立てられたのも当然な話だ。それでも、当人たちは、大森彦七きどりで、「いっぺん咬み殺されるほど、可愛がられてみたいよ」などと煙脂さがり、島原通いが募るばかりだった。

その廓の遊女で、折しも嬌名をはせていた葛城、薫、三夕を、仲間の三人が思いおもいに身請して、嵯峨、東山の饗、藤森のあたりに閑雅に住まわせ、契りが重なるうち、女たちの一人で夢介の胤を宿し、世之介と名づけられた子を生んだ者がある。明白に書くまでもあるまい、そのへんの消息なら御存じの向も多かろうから。

親たちの寵愛はもとよりのこと、世にいう「おんば日傘」で、「ちょうちょうちょうちあわわ、かいぐりかいぐりとっとのめ」とあやされて、手を打ったり、頭を振り立てたりの幼さもいつか過ぎ、四歳の十一月には、髪置（幼児三歳で髪を生やす）、翌る春には袴着（幼児五歳で初めて袴を着る祝い）という祝儀をすませ、祈願の甲斐あって、六つの年の疱瘡はごく軽く、痕も残らなかった。

さて、あけて七歳の夏のこと、夜半にふと目を覚ました世之介の、枕をのけて欠まじりに引き鳴らす障子の鉤匙の音に、次の間で宿直していた女中がそれと気づいて手燭をともし、抱き擁えて長廊下に足音を響かせながら、東北の家蔭まで来て、南天の植込み、敷松葉の庭先に小便をさせたあと、手水を使わせるのに、ひしぎ竹の濡縁で足ざわりは荒いし、ひょっと釘の頭でも出ていてはと、灯をさし寄せてやると、

「そんなもの消しちまって、もっとそばへおいでよ。」

と言うので、

「あなた様のお足もとがあぶのうございますから、こうして灯をお見せ申しますのに、暗くいたしましては……」

と言葉を返すと、こっくりこっくり頷いて、

「お前、『恋は闇』ということを知らないんだね。」

守刀を持って供をしていたもう一人の女中が、言うがままに吹き消すやいなや、その女の左の袖を引っ張って、

「そこらに乳母はいないかい？」

と、声を潜めるほどの早熟っぷりだった。

「たとえてみれば、天の浮橋で鶺鴒の尻尾の振りようを見て、何やら会得するところがあったという神話そのまま、まだ男女媾合の術も知らないうちから、その萌芽だけは生じているらしい」という意味を、女中たちから、逐一奥様へ言上し、あわせてお喜びをも申し添えたようなわけで。

この時分から次第にその気が募って行って、同じ絵本でも、怪しげなのばかり集め、本箱のなかは、あらかた他見の憚られるようなものばかり。

「この『菊の間』へは、わたしの呼ばないかぎりはいって来てはいけないよ。」

と、堅く出入りを戒めたりするのも心にくい。時に、子供らしい折紙細工をしても、

「これは『比翼の鳥』だよ。」

とか、花を造って枝につければ、

「これが『連理の枝』さ。お前にあげようか。」

などと、それらの拙い作品を女中どもにくださるといった具合で、何かにつけて、それへ

関りのないことはなかった。また、犠鼻褌をするにも人手は借りず、帯も自分で前結びにしてから背後へ廻すし、兵部卿という香を袖に炷きこめたり、その色っぽさといったら、大人も遠く及ばないほどで、けっこう女の気持をときめかせた。だから、同じ年ごろの友達と遊ぶにしても、空に舞っている凧などには目もくれずに、

「よく『雲に梯』なんて言うけど、昔は天にも流星人があったのかしら。」

だの、

「一年たった一度、七夕の媾曳に、もし雨が降って、会えなかったらどんな気持だろうね。」

だのと、遙かな天界のことまで一々色恋に結びつけてはやきやきしているような子だった。

この世之介は、五十四年の生涯に、関係した女の数、三千七百四十二人、男色の相手が、七百二十五人、と、自分で日記につけているくらい。「筒井筒、振分髪」の、ほんの真似事じみた情事から始まって、それほど腎水を替え乾しながら、よくまあ生命が続いたものだ。

（一）大森彦七は足利尊氏の家来で、湊川で楠正成を討った武士。
（二）イザナギ・イザナミ二神が鶺鴒によってはじめて交合の道を知った故事。
（三、四）ともに男女の契りの深いことのたとえ。北翼の鳥は雌雄が一体、一翼、一足で、嘗時も離れず飛び、連理の枝は一根に雌雄二幹を生じ、枝脈つらなっているものという。
（五）恋ばぬ恋のたとえ。
（六）『伊勢物語』の歌、「筒井筒、井筒にかけしまろがたけ、おひにけらしなあひ見ざるまに」

はずかしながら文言葉

文月七日、すなわち七夕、どこもかしこもその支度で、一年じゅう埃まみれにして置いた金行燈や油差し、または机、硯の汚れを洗い清めたりするために、ふだんは澄みきった川瀬もみるみるうちに芥の流れになってしまう。

洛北遮迦山金龍寺の入相の鐘で、ふと後醍醐帝の第九の皇子が八歳で詠まれたという和歌も思い出されるにつけ、（もはや世之介も小学に入れなければならない年になった）と心づいて、そのころちょうど山崎なる伯母の手許に預けてあったを幸い、むかし宗鑑法師（室町末期の俳諧師）の一夜庵の跡というのに住みつづけている人が、滝本流の書を能くすると聞き、そこへ弟子入りさせてやった。ところが、のっけに手本の紙を差し出すなり、

「これへ書いていただく文章には、少々注文がございますのですが……」

と言うので、師匠の坊さんもびっくりして、

「とはまた、どう書けとおっしゃるのです？」

「はい、では、かようにお願い申しましょう。『たいそう厚顔しいようですが、我慢しきれなくなったから申し上げるのです。およそわたくしの目つきでもおわかりのこととは存じますが、二三日前、伯母様のお昼寝の間に、あなたの糸巻のあるとも心づかず踏み割ってしまいましたのを、なに、かまいませんよ、とばかりで、お慍りになってもよさそうなものを格別のお咎めがなかったのは、きっとあなたのほうでもわたくしにそっとおっしゃりたいことがおありなのではございませんか。もしおありなら、どうぞ御遠慮なくおっしゃってください。聞いてあげましょうから』……」

と、まだまだ長くなりそうな文言を並べたてるので、師匠も呆れて、ここまではわざと書いてやったようなものの、

「もう鳥の子紙がなくなった。」

と空呆けてみせると、

「では、あとは尚々書にして、行と行との間に書き込んでください。」

と、頼むのを、

「まあまあ、またあらためてのことにしたらどうだね。今日はまずこれまでにしておきなさい。」

と、内容が内容だけに笑うわけにもいかず、ほかにいろはを書いて与え、これを習わせることにした。

日のくれぐれに迎いの者が来たので、世之介はそれにつれられて町方へ帰って行った。初秋の風が急にざわめいて、伯母の家では、女中たちが洗いあげての絹張り、簽をはずしたり、糊の硬い布は砧で搗ったり、がやがや

と立ち騒いでいる最中で、
「この染色のいいのは御寮人様の御普段着だけど、こっちの、撫子の腰模様のある梔子色のお召物は、一体どなたのかしら。」
と一人が訊ねると、ほかのが、
「そりゃあ、世之介様のお寝衣さ」
折からそれをぞんざいに畳みかけていた一季奉公の下女中が、
「そんなら、いっそのこと京へやって、あっちの水で晒させたらよさそうなもんだのにねえ。」
と言うのを、通りすがりに世之介が聞き咎めて、
「そんな垢だらけの手で洗わしてやるのも、『旅は情』ということがあればこそだ。」
と呟いたので、下女中は、恥ずかしさに返答もならず、
「御免くださいまし。」
と言い捨てに逃げ込もうとする袖をひかえて、
「それはいいから、この手紙をおさかさんに、そうっと差上げておくれ。」
と頼まれるままに、あとさきの分別もなく、この家の娘に手渡しすると、彼女のほうではてんで覚えのないことだから、顔を真赧にして、
「こんなもの、一体だれから頼まれて来たのさ。」
と、腹立ちまぎれに荒っぽく叱っている騒ぎを母親が聞きつけて、「まあまあ」と宥めてから文面を見ると、紛う方なくあの手習師匠の筆跡と知れて二度びっくり。(書いてあることはまるっきり取り止めがないけれど、それにしても……)と、首を傾げたが、師の御坊こそいい面の皮で、とんだ濡衣を着せられ、(故まって事細かに言い解くのもかえって変な具合なもの)と、弁疎もならなかった。そのうち、口煩いは世間の常で、面白半分尾鰭をつけ、あらぬ噂の種となった。
一方、世之介に従姉を想っている由を打明けられた伯母は、(今まで子供のこととばかり軽く見過ごして来たけれど、そうでもない、明日は妹のところへそう言ってやって、京でも大笑いをさせてやろう)とは思うものの、色にも出さず、ひとり心のうちに、(わが子ながら、顔貌もまず十人なみだし、ある家との先約はあるにしても、年さえもう少し釣合っているなら、世之介に遣わしてもいいのだが……)などと胸ひとつに納めて、その後気をつけて見れば見るほど、することなすこと黠慧しく、早熟くさったものだった。
一体、ほかのことならともかく、書物だけは、迂濶に引き受けるべきでない、と、これは迷惑した坊さんの、あとあとまでの喞言だったとか。

(一)『太平記』巻二十一に恒良親王の歌として、「つくづくと思ひ暮して入相の鐘を聞くにも君ぞ恋しき」とある。

人には見せぬ所

鼓も興の深いものには違いないが、何しろ『松風』(謡曲)の「跡より恋の責め来れば」のところばかりを、明けても暮れても根気よく打ちつづけているので、しまいには親の耳にも騒々しく、にわかに止めさせて、世を渡る男の表芸、商法見習のために、母方の親戚で、両替町の春日屋というのへ、世之介は、客分めいた奉公に出されることになった。ところが、さっそく「死一倍」といって、親が死んで家督相続となれば、それがつい翌日の出来事であろうとも、元金を倍にして返さなければならない高利の金を、銀で三百目の手形で借り込んでしまった。いかに「慾の世の中」とはいえ、貸す奴も貸す奴、大人げない話だ。
時に世之介は九歳。端午の節句とて、菖蒲を葺きかけた軒先に、見越しの柳が生い茂った木下闇の、しかも日くれ時、溝際の篠竹の目隠し垣へ、脱いだ笹屋縞の帷子から腰巻までも投げ懸けて、菖蒲湯の行水をつかおうとしている中働きくらいの女があった。自分のたてる微かな水音のほかには松風ばかり、よしんば聞かれたとしても壁に耳、よもや見る目はあるまいとの気安さから、恥ずかしげもなく、細長い撓の跡の残っている膕のあたりの垢をこすり落とし、なおそこらへんを撫

で廻す糠袋の肌ざわりに、いつか乱心となって、風呂の湯玉がだんだんぎらついて来ようというもの。その怪しかる振舞を、亭に備えつけの望遠鏡片手に屋の棟に制いつくばった世之介が、まじまじと見つめているのもおかしな話で。

ふとそれに心づいた女は、顔から火の出る想いで、声も立て得ず、ひたすら手を合せて拝むのを、一層面白がり、嵩にかかって、顰っ面で指さし笑い崩れる。どうしようもなくなって、いきなり塗下駄を突っかけて逃げ出しかける女を、目の荒い袖垣の隙間から呼び止めて、

「これこれ、ちょっとお待ち。こんばん初夜（午後八時一九時）の鐘が鳴って、みんなが寝鎮まってしまったら、そうっとここの切戸からはいって来て、わたしの言うことを肯くんだよ。」

「とんでもないことです。」

「よし、そんなら今のことを、女中たちみんなに言いふらしてやるから。」

とからかわれたのは、一体どういうところを見られてしまったのか。女中も困りきって、

「まあまあ、ともかく……」

と、曖昧に、一時の言い遁れを言った。

その晩、まさかと思うから、たれに見せるでもない夜の頭髪の乱れを、無造作に手束に掻きあげたまま、うち寛いでいる女の部屋へ、そっと忍んで来るのが世之介らしい足音。詮方なく、いいほどに御機嫌を取り結んで置いて、小箱をひっ掻き廻すと、芥子人形、起きあがり小法師、雲雀笛など取り揃えて、

「これはわたくしの大事な大事なものなんですけど、あなた様になら惜しいとは思いません。お慰みに差上げましょう。」

と、玩具でだましにかかったが、一向嬉しそうな様子もなく、

「今に子供が生れたら、泣きやませる役には立つだろう。ほれごらんな、この起きあがり小法師はお前に惚れたかして、そっちへばかり転げたがるよ。」

と言うかと思うと、膝を枕にごろりと横になる様子まで、立派にもう一人前だった。女は真赧になって、（こんなところをひとに見られたら、よもやただ事とは思うまい）との心配を無理に押し鎮め、世之介の脇腹などそっと撫でさすってやりながら、

「去年の二月二日、天柱にお灸をおすえなさいました時、わたくしが痂に塩をつけて差上げましたけど、あの時分とは、また一段と可愛らしくおなりですわ。さあ、ここへおいでなさいまし。」

と、帯をしたままの懐へ入れて、じっと抱き竦めておいて、急いで部屋を駆け出すなり、表の格子をどんどん叩きつけながら、

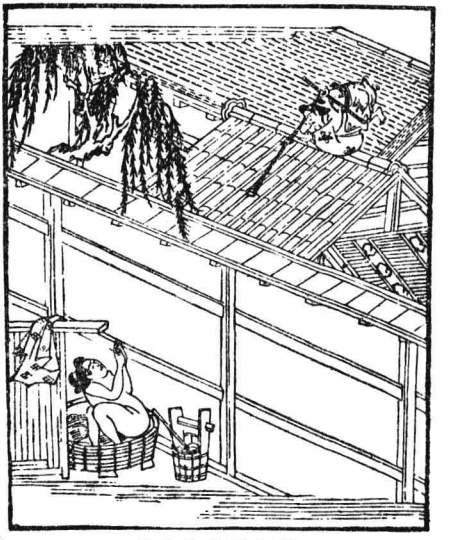
「世之介様の乳母さん。」

と、呼びたてて、「御無心ですがおっぱいを少少いただけませんか。」

と、どうやらその場を取り繕い、あとから一伍一什を話して聞かせたところ、

「まだまだと思っていたのに、いつの間にかもうそんなふうにねえ……」

と、腹をかかえてともども大笑いになった。



人には見せぬ所

袖の時雨は懸るがさいわい

世之介の黠慧しさは「十歳の翁」と言ってもいいくらい、生れつき美しいところへ、小人としての身躾にもそつがなく、そのころ「下坂小八風」といって流行の、鬢を引っ詰め、髷

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

から離して「立懸」の結い方にしている様子がいかにも嬌冶かしかった。当人としては日ごろから、「誘う水あらばいなんとぞ思う」の心構えに怠りはなかったのだろうけれど、よそ目にはまだその道の諸分までわかっているとも見えず、いわば「雪中の梅」で、やがての花を待つ心地がされた。

ある日、暗部山のあたりに住む知人を訪ねて、霞網、鵜竿、赤頭巾を被せた梟の囮などを使っての小鳥狩に、朽ち傾いた茅の軒端や、松、桂を小楯にとったり、または、叢のうちに身を潜めたりして、時のたつのを忘れた。で、まだまだ遊び足りない心地ながら帰路につき、麓ちかくまで来かかると、一天にわかにかき曇って、たいしたことでもないがぽつぽつと落ちて来た。あいにく雨舎をするような木蔭もないので、頭の上に袖をかざしただけで、(ええ、ままよ、いっそのこと濡れて行けだが、墨で描いた僕の作り髭が流れるのは困りもんだ)などと思っているところへ、その村に隠棲している男が追いついて来て、背後からそっと傘をさしかけたとも心づかず、(おや、もう熄んだのか)と、振り向きざまに、

「これはどうも、御親切、ありがとう存じます。今後ともお眤近のしるしに、お名前をお聞かせくださいませんでしょうか。」

と話しかけたが、ろくに返事もしずに、穿替の草履を差し置くやら、懐からはひどく小ざっぱりとした櫛道具まで取り出すやらして、供の者に渡しながら、

「これで、そそけたおくれ毛を掻きあげておあげなさい。」

と言われた時の嬉しさはどんなだったろう。いつか時雨も霽れて、折から夕虹の、今にも消えかからんばかりの風情で、いろいろ言ったあげく、

「これまでわたしには想いをはこぶ人とてなく、空しい月日を過ごして参りましたのも、愛嬌の薄いせいかと、わが身でわが身を怨んでおりましたところ、今日こうしてお目にかかれましたのは、誠に不思議な御縁と申すよりほかございません。今後は親身と思召していただきとう存じます。」

と口説きたてたが、男は冷たく、

「途中御難儀の御様子でしたから、お世話申しただけの話。衆道の契りなど思いもよらぬことです。」

と、取りつく島もないのに、白らけ返って、小人(世之介)、手持無沙汰にしょんぼりさしうつ向きながらも、心のうちに(いい年をして恋知らずのこの男松め。みるまに老い朽ちてしまうのに……)と、相手を憫笑しながら、木蔭に腰をおろし、さて言うには、

「ずいぶん無情い思われ人もあればあるものですね。誠の涙も『袖を濡らす水』ぐらいにしかお汲み取りくださらないのでしょうか。孔子気取りに納まり返っていたあの鴨の長明にしてからが、いつとはなく門前のよか稚児さんにじゃれついて、つい方丈の燈明もつけ忘れ、心の闇に迷ったというではありませんか。また月も恥じろうばかりの不破万作が、勢田の橋詰で、行きずりの人の袖に蘭麝の香りを移したという故事にしても、みなこれ衆道の情ゆえでございませんか。」

こう喋々とまくしたてても、さらに肯き入れてはくれなかった。

「あの『秋の夜長物語』[四]ではありませんが、小人のわたしから、これほどまでにくどくどとお願い申し上げるというのは、それこそ『寺から里へ』のたとえどおりで、もとよりあべこべは知れた話ですけれど、お稚児の白糸の昔語にもおささひけはとらないつもりのわたしの心底。さあ、いやならいやと、きっぱりおっしゃってくださいまし。」

と詰め寄ったが、一向に承知の様子を見せないのに、しまいには小面憎くさえなった。ややしばらくして、やっと男は口を切って、

「では、日を更えて、中沢という村の、お宮の拝殿でお目にかかっての上のことにいたしましょうか。」

と、あやふやながら、後日の約束をとり交し、いざ帰ろうという段になると、ひとしおとまた離れがたない想い。笹竹の葉を押し分けての、湿っぽい袖にすがりついて、

「風水洞の亭で、念者の蘇東坡を、先に行っていた李節推が、今か今かと待ち焦れていたという、あの気持で、わたしもその日をお待

ち申しておりますから……」

で、おいおい迫り来る夕闇のなかを、見返り、見送りつつも別れ帰った。

後日、その男が、数年来命までもと打込んでいる若衆にこの話をして聞かせたところ、

「それは二度と再びあろうとも思われないほどの美談です。わたしとの仲を大切に思われたからのことでしょうけれど、それにしても酷いなされ方。このままにはすまされません。」

と、密かに心を決し、二人の恋を斡旋って、自分は潔く身を退いてしまったという。

（一）若衆。男性同士の同性愛、すなわち男色でいうところの「稚児さん」。
（二）男色。
（三）豊臣秀次の小姓で、容顔美麗なこと当代随一といわれていたが、かつてある武士に懸想され、勢田の橋の下で契りを結んだが、秀次下賜の闇寄待の名香を袖に焚きしめていたので、あやうく発見されかかったとの話がある。
（四）室町時代の稚児物語。
（五）男色における兄貴分。

尋ねて聞く程ちぎり

九月十日の夕方、世之介は、昨日の菊の節句から飲みつづけのほろ酔い機嫌で、唐物屋の瀬平というのを誘い、枕詞からして新枕、伏見の里へ繰り出した。

東福寺の入相の鐘が響きわたる頃には撞木町、言わずと知れたここが目当で。鑓屋孫右衛門の店近くで駕籠をおり、息切れがするほどの急ぎ足で、墨染の水を掬む間もおそしと、廓の南門からはいって、

「なんだって東の門は締めておくのだろう。少々廻り遠い恋路じゃないか。」

などと戯言を言いながら、徐にあたりの様子を見廻すと、公卿でもあろうか、冠の載りよさそうな頭の恰好で、色の小白い男の隠れ遊び、宇治の茶師の手代と睨んだ目に狂いはなかろう男、それから六地蔵、上方、淀の下りを待つ旅人、愛宕土産の樒や粽の風呂敷包を肩にして、緡の小銭を長さで目算りながら、気に入ったのが見つかったらと、一軒のこらず入念に見て廻った揚句が、結局また泥町のほうへ出て行くのも、肝が読めて面白い。

世之介が素見の人足のいくらか疎になるのを待って、西側の中ほど、ささやかな出格子づくりで、龍田川と思ぼしい襖絵も紅葉ちりおりに破れ、煙草の煙が鬱陶しく立ち罩めて、吸殻の捨てどころもないというような、ひどく見窶しいある一軒の楼に立ち寄ったのは、そこで張見世していた、無口らしい、しいて人目を惹こうとするふうもない、気の優しげな女郎が目についたからで。見れば筆を把って、どうやら和歌の上五文字を「袖の香そ」がよかろうか、「きょうの菊」にしたものかと、とつおいつしている様子、それが大層奥床しく思われたので、

「この女は、どうしてこんな小店にいるのだろう。」

と、訊くと、瀬平、物知り顔に頷いて、

「ここの楼主というのが、廓じゅう評判の貧乏人なので、この女には誠に気の毒なわけ。もっと醜女でも、衣裳持物次第では立ち勝って見えるものですのに、ここでは、綾目八丈、唐織など、みんな島原の太夫の着ふるしを買い込んで来て、どうにか恰好だけつけている始末なりで……」

と話してきかせた。いずれにしろ安値な遊廓に違いない。

二人は挨拶なしに店先に腰をおろすと、脇差、紙入などそこらにほうりだして、さてあらためて見れば見るほどいいところのある女だった。

「どうした廻合せでこんな楼に住み込んだのか。ことさら憂き勤め、さぞかし辛いことだろうね。」

と慰めてやると、

「他人様から、心の奥底まであけすけに見透されるというのも、万事、はしたなくなっているせいでしょう。何かにつけて足らぬがちなところから、つい慾が出まして、お客様に物ねだりをしてしまいますが、それとてわが身につくわけではございませんのです。壁、戸障子の腰張で、隙間風を防ぎますのも、小野の炭、吉野紙、悲田院の上草履というような商売道具までも、みんな自分もちです。も

の寂しく暮れて行く雨の日、風の吹きすさぶ晩など、お茶を挽くことだって珍らしくはありませんし、御香の宮のお祭から、端午の節句、藤森神社の祭礼といった具合に、季節季節の物日が廻って来ましても、どなたにお頼み申してその日の支度をしていただこうあてがあるわけではございませんのに、楼主さんからは遠慮会釈なく取り立てられます。それでも、どうにか二年ばかりは過ごして参りましたけれど、行くさきざきのことを考えますと、もうもう生きているそらはございません。片田舎においでの親たちはどうお暮しなされてか、さっぱり御様子も知れませんし、ましてこんなところへ訪ねて来てくださるはずはございませんので……」

と、そぞろ涙にくれながらの打明け話。

「で、その、御両親の在所というのはどこなんだね？」

「山科で、源八と申す者でございます。」

との返答に、

「こうしてお前さんの客になって、そこまで打明けられたからには、まんざら他人のようにも思えない。ちかぢかに一度訪ねて行って、お前さんの無事な様子だけなりと知らせてあげようよ。」

と言ったけれども、女は嬉しそうな様子もみせず、

「とんでもない。お訪ねくださるなんて、そんなもったいないことは、断ってお辞退申し上げます。初めの頃は茜草の根を掘って、どうやら暮しを立てておりましたのですけれど、今では老耄てしまいまして、それもかなわなくなり、往き来の人の袖に縋って物乞いの身の上、そればかりか、因果と人様のお嫌いなさる業病でして……」

起き別れてのち、そんな話をきかされながらもまだ親里を訪ねてやろうという気が失せなかったので、わざわざ山科まで出かけてみると、柴の編戸に優しくも朝顔を絡ませ、長押には槍一筋、埃ひとつ被せず鞍を飾って、身辺からは朱鞘の大小を離さない、といったふうな父親が迎えて、ついひと通りの挨拶のあと、世之介から、実はこうこうかくかくの次第で、と来訪のわけを告げると、

「いかに女のあさはかさとはいえ、今の身の上でいながら、他人様に親の身元を明かすとは、なんたる不所存者か。」

と、口惜し涙を流すのに、世之介も当惑して、さまざまに言い慰めてやった。また、どこまでも昔の素姓を隠そうとした女の心がけのよさにも感服させられて、ほどなく身請し、その後も見捨てず逢いに行った。これが、世之介十一歳の冬の初めのことで。

(一) 伏見の遊廓のある町名。
(二) 伏見墨染寺門前町にあった名水。墨染の井。
(三) 穴あき銭の穴を通して両端を結ぶ藁縄。
(四) 伏見の遊女町柳町の俗称。
(五) 遊里の祝日。紋日、売日ともいう。

煩悩の垢掻

十三夜、待宵、十五夜、いずれにしても月の名所は、あすここと数あるなかに、とりわけ須磨は、というので、折からの凪を幸い、貸切りの小舟で乗り出した。和田の岬を廻ると、熊谷が敦盛を取って抑えて突き刺した、という角の松原から塩屋へとさしかかるが、

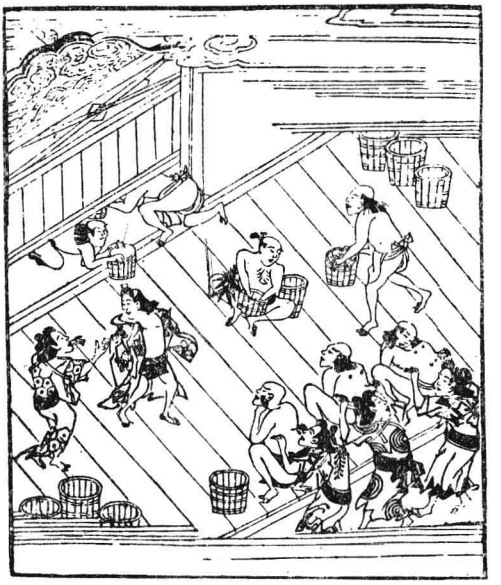
「ここらでできる酒の銘に、『源氏』とつけたのは、その時の味のよさを利かせたつもりかね。」

と、世之介は、同伴の連中を笑わせたりした。

少しばかり海の見晴らせる浜辺に宿をとって、京から持参の「舞鶴」「花橘」などいう酒樽の口を切り、宵のうちこそ面白おかしく騒いでいたが、夜更けるにつれて、月影さえもの凄いばかり冴えかえる折も折、夜鳥のひと声は番はなれし孀なし鳥かと、ひとしお淋しさが身に滲みて、ただのひと晩たりとも一人寝のならぬ輩だから、たれ言うとなく、

「若い蜑女でもいたら呼んで来い。」

世話する者があって、やがてそれへ現われた女を見ると、櫛一枚さしていない蓬々髪、顔に白粉っけなく、詰袖の、裄丈もつんつるてん、あたりが急に磯臭くなったのに、むかつく胸を延齢丹（気附薬）を嚙んでどうやら抑えながらも、相変らず口だけは達者で、



煩悩の垢掻

「むかし在原の行平が、流人の憂晴しとばかり、さんざ足腰をさすらせたあげく、離別の記念だと言って、香包、衛士籠、杓子、摺鉢まで、三年間の世帯道具一切くれてやったという、その相手がどんな奴かは知らないけれど、まずまあこの手だったんだろうなあ。」

などと、冗談口の種にした。

翌朝、兵庫まで引き返して来た。ここの遊びの、昼夜に区分られているばかりか、「半夜」という忙しない規定さえあるのは、何ぶん客といえば、風待している旅人ばかりといってもいい港町のせいで、今が今にも船頭に呼び立てられたが最後、小唄も途中で聞き捨てに立たねばならず、ささされた盃を返すいとまさえない、という慌ただしさ、女に未練の残る者にとっては、さぞかし本意なく、後髪を引かれる想いのすることだろう。そんなわけで、落ちつきも悪いし、ここで休を汚してしまうのも、と思って、風呂屋へ行くことにした。ところがそこに、中高の、受口で、ちょいとおつな口をきく湯女がいて、

「浮名が立ったら水をさしゃあいいやね」

など洒落のめすので、

「お名前伺わせて頂戴な。」

わざと気障っぽくもちかけると、ただひと言、

「忠度」

と来た。

「なるほど。それじゃあ、ただあ置けないわい。」

と、あやふやながら約束をすますやいなや、たちまちがらりと様子が変って、上湯はふんだんに汲み替えてくれるし、出ればさっそく香煎を持って来る、浴衣を取って着せかける、煙草盆の火入に気をくばる、鬢盥の水を運ぶやら、鏡を貸すやら、手の裏返す現金さは、いずこいかなる土地でも変りはない。

女の装形を見るに、一枚着の裾を高々とからげ、白無地の帯を自堕落に結んで、

「なあに、切れたって抱主の損さ。久三、提灯つけとくれ。」

そう言う片手に草履をひっ摑んで、潜戸を出るなり、すぐもう大声あげて朋輩の蔭口に始まり、つづいて朝晩のお汁が濃いの淡いの、「鋏をくれるって約束、さては一杯くわされたかな」の類で一つ残らず聞き苦しいことばかり。

宿の座敷に通るが早いか、真綿の置帽子を取って壁へ貼りつけ、立ったままで行燈の向きを変えて、ほの暗い真中あたりに座を占めると、さっそく把りあげた煙管の雁首が火のようになるまで喫いつづけるし、のべつに欠はする、遠慮なしに便所へは立つ、そのたびごとの障子のあけたての荒っぽさ。床にはいったと思えば、屏風一重で相部屋の朋輩に話しかける、がさごそ搔悶いて蚤をせせる、更けての鐘の音に、

「ねえねえ、あれ丑刻（午前二時）かしら？」

と、どうでもいい時刻の穿鑿、気に入らない話には返事もしず、あれも、どうなと勝手にしたらよかろうの素気なさ、紙は客のを使って、あとはぐうぐう高鼾。ほっとしていると、いやに冷たい脛を載せかけてよこして、「焚きつけるよ」の、「ああ、汲み込んだよ」のと、譫

言でまで稼業の知れるあさましさだった。いかに貧ゆえとはいえ、いつ頃からこうまで下劣てしまったものか。

元来「丹前風」というのは、江戸の松平丹後守の屋敷前に、まだ湯女風呂の盛っていた頃、情合もこまやかだし、髪形なら起居振舞まで、ひときわ群を抽いていた勝山というのが、袖口の広い衣裳で褄を高くとるとか、そのほか何かにつけて、一風変ったことをしてみせ、これが流行の基となって、一般にもてはやされたのだそうだ。この女は、後に吉原の太夫にまで出世して、高貴なお方の枕席にも侍り、前代未聞と謳われたが、ひと口に湯女といっても、一時はそれほど豪勢なのがいたと聞くのに。……

（一）業平の兄在原行平は仁和三年須磨に流され、三年間の流寓中、松風・村雨の姉妹を愛した。
（二）風呂屋に抱えている私娼。

別れは当座払

くすねて貯めた小銭を、小巾でお針女の縫ってくれた茶宇縞の前巾着に入れ、下男あがりの店の若僧と何やら囁き交わしたのは、同じ心の誘い水、清水、八坂あたりへの夜遊びでもあろうか。

「おい、ここらじゃないのか、いつぞやお前が話してた、唄が上手で酒がいけて、おまけにちょいと可愛らしいのがいるってのは。菊屋かい？　三河屋かい？　それともこの蔦屋ってのかね？」

と、心当りをうろついた揚句、やっとのことで萩垣に挟まれた路地の奥に、一軒、梅に鶯の屏風を立て廻し、床の間には誰が弾き捨てたか、一筋糸の切れたままの樫棹の三味線が横たわり、炭団の埋み火もほの見えるうるみ朱の煙草盆、といったふうな家が目についたので、そこときめたが、薄湿りの来ている畳の踏み心地は、あんまり嬉しいものでない。ありふれた盃と塗の竹箸とが、祇園細工の足附膳に載って出て、肴は、杉のへぎ板に挟んだ焼物のほかに、いずこも同じ蛸、梅干、紅生姜で、さて女はと見てあれば、だらしなく束ねた「四つ折」の髪、折からの晩春にふさわしい藤色りきん縞の小袖に、さも利いたふうな茶縮子の幅広帯を挟み結びに締め、懐紙の間から妻楊子の尖を窺かせて、朝鮮紗綾の腰巻ちらちらと、左の手に朱蓋のついた煙草盆の柄をひっ摑んで立ち現われ、ぺったり尻を据えるやいなや、

「どうしたのさ、いやにお静かねえ。ちっとお盃をはやらせたらどう？」

と、のっけから催促がましい下司っぽさ。しばらくは鼓ばかりになった榧の実をあさり散らしていたが、そうかといって、まんざらでないところもあるので、ささされた盃を受けてやると、塩焼の魚の真中あたりを不様に挟んで突きつけながら、

「まあ、もう一つお重ねなさいなね。」

来た当座は、（これじゃあとてもやりきれないから、どこか河岸を替えて遊び直そう）の肚でいたのに、しっきりなしの銚子の替り目とて立ち端がなく、そのうちふと目についたのは女の腰つきで、これだけはなんとも申し分がない。

「おいおい、ここはひとつ、例の似卜流でいこうぜ。」

と供の者と隠話で謀し合せて、女にもその由呑み込ませると、すぐさま二枚折の花莫蓙、こつこつ触れ合う木枕の音もたまにはおつなもの。

女はさいぜんのりきん縞を、手っ取り早く薄汚れた浅葱の寝衣に着更えてしまい、鼻唄かなんかでひと足お先に寝床に横たわって待っていようという寸法。世之介とてもはや十三歳、声変りもすみ、大人も顔負の狎々しさで、

「ねえ、こんなちょんのま遊びでも、あながちこれっきりの縁たあ言えない、場所がら、観音様のお引合せでもあろうかね。このさきともちょくちょく会っているうちには、ひょっと腹がせり出さないもんでないが、幸い、近所に子安地蔵もあることだし、お供えの餅の百や二百は、面倒でもこの阿爺様が引き受けようから、安心して帯をとくがいいや。」

などと、相手には返事の間もないほど、のべつにまくしたてながら、悪巧者に、ありったけの秘術を尽した。

こうして互いに打ち解けてから、ふと女が、さしうつ向いてものをも言わず、目を潤ませてしまったのに、すれたようでも根が初心い世之介が、心配になって仔細を尋ねると、初めの二三度は押し黙っていたが、やがてしみじみとした調子で、

「今でこそこうした身の上に堕ちてますけど、ついこの出替りまでは、こうみえてもある宮家に御奉公申し上げてたんですよ。ところがそこの若宮様が、末も末もどんづまりの、あたし風情にお情をおかけくださいましてね、そうっと部屋へ忍んでいらっしゃるんです。夜っぴて仲よくしたあの晩のことは、……ええ、忘れもしません十一月の三日で、うっすら初雪の降った晩でしたが、もったいなくもお手ずから、『儂の肌はこれだよ』とおっしゃりながら、丸めた雪をあたしの懐に押し込まれた時の、そのお可愛らしい御様子が、今のあなたと生き写しだったので、ついあの頃のあれやこれやが思い出されまして……」

と、こういう話。

「ふーん。それでさ、宮様と俺と似ているといって、一体どこらが……」

で、またもや悪戯にかかる手を、女はさりげなく躱して、

「いいえ、どこもかもありますものか、とりわけ、ひどい風の朝、『変りはないか』とお尋ねがあって、白絖の小袖をくだされたり、西陣に一人ぽっちで暮している母の身の上までお案じくだすって、米、味噌、薪、家賃のことまでお心をくばられるのです。僅か十一やそこらで、よくまあそこまで細かにお気がついたもの、と感心のほかありませんでしたが、どうやらあなたも同年か、万事によく気のおつきなさる御性分らしく思われて、ひとしお可愛さは増すばかりです。」

などと、年の頃を見計っての、なかなか気の利いた殺し文句。こんなのを、「都の人蕩」というのだとさ。

（一）京都の清水、八坂神社の門前には色を売る茶汲み女を置いた色茶屋が多くあった。
（二）似トとは酌婦兼娼婦の二役をする茶屋女。

巻の二

はにうの寝道具（一）

この年、十四の春も過ぎて、四月朔日の衣替を境に、着物のふりをふさいだりして大人仕立となったが、「もうしばらくあのままにしておいてほしかった」と人々に惜しまれたのも、なんとも言えぬ後姿のよさゆえだった。

ちょっとした思惑もある世之助は、一人二人の供をつれて、初瀬詣と出かけた。紀貫之の「人はいさ心も知らず」が思い出される雲井の舎という坂のあたりは、「香に匂」ってもいいはずの梅が、すっかりもう青葉になっている。なお山ふかく分け入って、目ざす社に着き、柏手を拍って叩頭くなり、

「誓文祈願。いつまで待たされるのでしょう、なるべく早く、色よい返事がほしいのですが……」

とぶつぶつ口のうちに祈っているのを洩れ聞いた供の者たちは、（なあんだ、またしても、祈っておいでなさるのは恋の成就かい）と、さぞ噴きだしたい気持だったろう。

帰途に、満開の頃の思いやられる松井から、十市、布留の神社を北に眺めて椋橋山の麓へ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com